

第十五回

薪

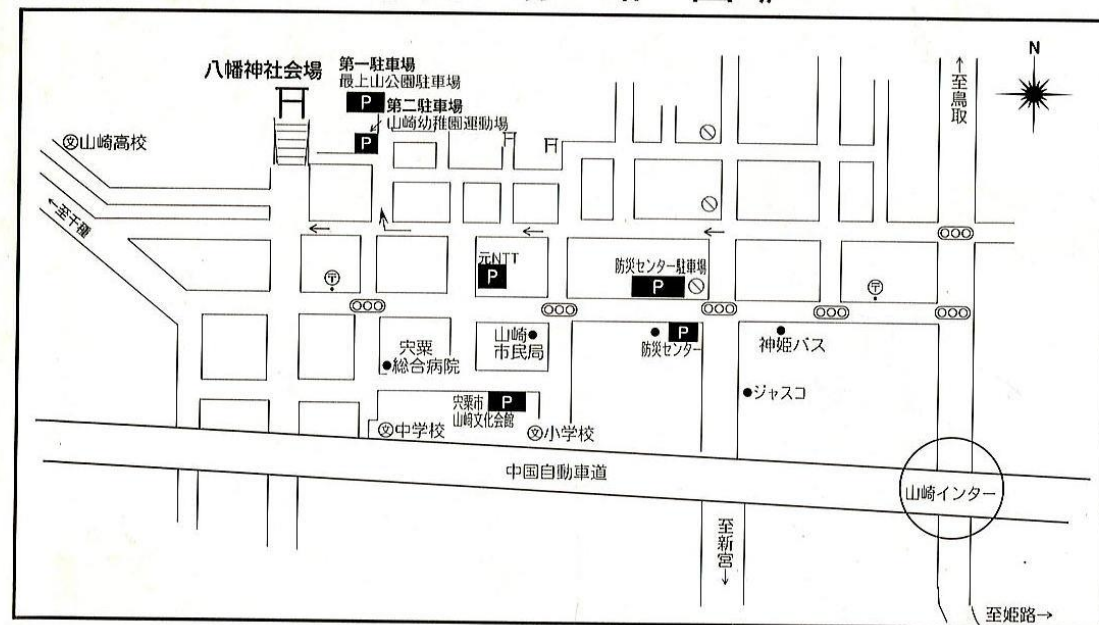
能



山崎八幡神社奉納

御鎮座千二百年祭記念

《会場略図》



と き 平成19年9月1日(土) 【小雨決行】

と ころ 宍粟市山崎町 山崎八幡神社境内
(台風等の不測の場合は宍粟市山崎文化会館)

第 一 部 宍粟市謡曲同好会 午後2時始

第 二 部 薪能奉納 午後5時30分始

主 催 山崎八幡神社薪能奉賛会

後 援 宍粟市・宍粟市文化協会・宍粟市教育委員会・神戸新聞社・宍粟市商
工会・龍野ロータリークラブ・山崎ライオンズクラブ・宍粟市医師会有
志・宍粟市歯科医師会有志・新潮会有志・昭和会有志・平成会有志

協 賛 宍粟市謡曲同好会

入場無料

事務局

山崎町山崎6 (山中医院内)

山崎八幡神社薪能奉賛会

TEL (0790) 62-0036

第十五回 山崎八幡神社奉納薪能開催にあたり

昭和五十五年十月に第一回山崎八幡神社奉納薪能を初演してから通算すると今年は二十七年目にあたり、回を重ねること十五回となりました。

この薪能の原動力となっていた前奉賛会会長 壺阪壽様、先代江崎金次郎師は既に故人となりましたが、当代一流の能楽をこの山崎町で上演し続けられた事を、地元の皆様のご熱意とご後援によるものと深く感謝申し上げます。

平成十五年と十七年演能は「山崎能」として山崎文化会館という広く整備された会場により多くの方々に観賞していただきました。

本年は山崎八幡神社千二百年祭にあたり色々なお宮の記念行事と共に、篤志家のご奉志により元禄十二年建立と伝えられ、傷みの目立ってきた八幡神社能舞台が再建されることとなりました。今年には是非星空の下で、薪の火のはぜる音と虫の音を聞きながら演能を観賞したいという大方のご意見もあり、第一選択を八幡神社能舞台といたしました。

今回上演の「西王母」は三千年に一度花が咲き、實を結ぶという中国の西王母園伝説に基づく祝言能であり、「正尊」は頼朝の命を受けて義経追討に向かった堀河夜討の史実を脚色した物語で弁慶に問いつめられた土佐坊正尊の苦しい言い逃れの起請文が中心となつて、「安宅」の弁慶の勸進帳と対比されます。

大蔵流狂言「伯母ケ酒」は、これも有名な古典狂言であり、何れも当代随一の演能者による舞台芸術を初秋の一夜を心行くまで味わいたいものと期待しております。



山崎八幡神社薪能奉賛会

会長 山中 陽一

第十五回 山崎八幡神社新能プログラム

司会 清水有子

(午後〇時半)

能舞台竣工祭(神事) 於神社本殿

(午後一時十五分)

能舞台鏡板 除幕式

(午後一時三十分)

能舞台舞台披き

神歌 江崎 金治郎

千歳 江崎 敬三

鶴 亀杉 浦豊彦 江崎 敬三

第一部 穴栗市謡曲同好会番組

(午后二時始)

一、連 吟・秋田泉謡会

鶴 龜
 シテ中村 明
 中村 昌子
 中村 清子
 小瀬七五三男
 篠原 宗平
 蒲田 哲子
 中坪 義治
 中坪 義治
 進藤 千秋
 進藤 千秋
 丸山 央
 大谷 正之
 ワキ中村 裕美

三、連 吟・池田掬水会

賀 茂
 大部 満男
 久宗 丑雄
 春名 一利
 柳田 薫
 山田 雄三
 安田 武嘉
 伊野 操治

二、連 吟・山崎篠謡会

嵐 山
 上田 隆雄
 原 忠雄
 原 みち代
 進藤ヒデ子
 山崎きよ子
 坂根文美子

四、連 吟・波賀翠謡会

羽 衣
 清水 康廣
 松本 繁信
 大成みちよ
 岡田 薫
 中田 勇

五、仕 舞・鶴崎観和会

松 風 春名 芳子
 田中 洋子
 放下僧 永井由美子
 鶴崎 和美
 鶴崎 智子
 鞍馬天狗 山國 重代

七、独 吟・山崎福王会

道成寺 語
 葎谷 曉

六、連 吟・山崎集杉会

班 女
 中谷 裕子
 三渡 圭介
 小泉 啓展
 吉川 宏美
 加藤 昭彦
 玉田 敬子
 三谷 恭三
 山根 悠子
 山中 陽一
 塚田 清一
 岸本 通哉
 名賀美小夜
 下村 弥

八、仕 舞・秋田泉謡会

高 砂 篠原 宗平
 大谷 正之
 中坪 義治
 融 小瀬七五三男
 進藤 千秋

九、連 吟・内山北露会

菊 慈 童
 秋武 春生
 梶浦 忠志
 内山 正作
 伊藤 弘之

第二部 薪能奉納

(午后五時三十分始)

修 祓 山崎八幡神社宮司 根岸敬佑

能奉行舞台改め 薪能奉賛会会長 山中陽一

觀世流 能 樂

寺澤幸祐

井上裕久

西 王 母

江崎金治郎 松本義昭

和田英基

間 茂山宗彦

辻芳昭

久田陽春子

上田悟

野口亮

後見

吉井基晴 田中章文

地謡

今村哲郎 今村嘉太朗 藤谷音彌 水田雄晤 齊藤信輔 上田大貴弘

火 入 式

挨拶

薪能奉賛会会長

山中陽一

祝 辞

宍粟市長

白谷敏明

祝 辞

兵庫県議會議員

高嶋利憲

大蔵流 狂 言

伯母ヶ酒

茂山千五郎

茂山七五三

觀世流 能 樂

義經 杉浦豊彦 静 上田絢音 江田笠田昭雄 熊井吉浪寿晃

大西智久

正 尊 江崎敬三

辻雅之 上田悟 清水皓祐 野口亮

起請文 翔入り

姉和 大西礼久 立衆 上田宜照 立衆 齊藤信輔 同 今村哲郎 同 水田雄晤 同 松野浩行

間 茂山七五三

後見坂

上田大介 口信男 今村嘉伸

地謡

今村嘉太朗 梅谷宏 山田義高 藤谷音彌 笠田利之 吉井基晴 多久島利之

附 祝 言

閉会の辞

薪能奉賛会副会長

鶴崎和美

(終了予定 午后八時半頃)

※会場内での写真撮影・録画・録音は、堅くお断わりいたします。また携帯電話の電源はお切りください。

お祝いのことば



安栗市長 白谷敏明

初秋とはいえ残暑厳しいおりではありますが、夕暮れの涼風はさすがに秋の気配をかんじさせてくれる頃となりました。
本日、「山崎八幡神社奉納新能」が厳肅かつ盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

この新能は、山崎八幡神社の歴史ある能舞台で昭和五十五年より開催され、本年で十五回目を迎えられました。これもひとえに山崎八幡神社新能奉賛会の皆様を始め、関係各位のご尽力の賜であり、深く敬意を申し上げます。

この新能は、前回、そして前々回と「山崎能」として山崎文化会館で開催されましたが、今年も折しも山崎八幡神社千二百年祭にあたり、再建されました新装八幡神社能舞台のご披露と、原点到り帰し鎮守の森で行われる新能を再現しようとの思いにより、再び山崎八幡神社に於いて開催されますことは意義深く、重ねてお喜び申し上げます。

さて、目まぐるしく変貌する現代社会において、「こころの豊かさ」が求められて久しいなか、ここにご参集の皆様は、日頃より長い歴史に培われた優れた伝統芸能や文化に触れられ、心豊かな生活をお過ごしのことと存じます。また、文化活動を通じ、文化を育てるまちづくりや地域の活性化に貢献いただいておりますことに深く感謝申し上げます。

今宵は、夜長月のひととき、幽玄の世界を楽しみ、何世代にもわたって磨かれてきた伝統芸能を堪能し、共に感動をあげたいと思います。

終わりになりましたが、「山崎八幡神社新能奉賛会」の今後益々のご発展と皆様のご健勝を祈念し、お祝いのことばといたします。

お祝いのことば



兵庫県議会議員 高嶋利憲

忠臣蔵で有名な松の廊下での刃傷沙汰が起こった頃に建立されたといわれる能舞台が八幡神社千二百年祭にあたり改築一新され、新装の舞台で奉納新能が催される事は大変喜ばしく、山崎八幡神社新能奉賛会をはじめ関係の方々のご苦勞に対しまして心から感謝を申し上げます。

ご案内を頂いて早速演目に興味を持ちました。便利な世の中で居ながらにして素人でもチヨコチヨコと調べますと大体の事がわかります。

脇能「西王母」は三千年ほど前、周の帝が催す宴に不老不死の女仙である西王母が桃をもって現れ帝に献上し優雅な舞を披露し天上へと去っていく物語で基本的には天下泰平、国土安全を神によりことほがれるめでたい出し物であり主催者側の意図がうかがえます。「伯母ヶ酒」は以前観賞したことがありまして、けちな酒屋の伯母から何とかして酒をいただくとする甥の話ですが、こちらはだんだんに酔いしれる過程の演技が見ものでかなり笑える作品です。雑能「正尊」は頼朝の命を受けた土佐坊正尊が義経を暗殺しようとするが逆に弁慶等に捕らえられる話でこの演目を選ばれたのはなぜか一度聞いてみたいと思いました。八幡神社が源氏の守り神であるという理由かと私なりに勝手に単純に想像してみました。

いずれにしろ上演が今から楽しみで、この幽玄の催しが多くの観客の方々に感動をもたらす事を期してやみません。あらためてこの機会を創造して下さった方々に感謝とお礼を申し上げます。

演目解説

観世流

能楽 西王母

せいおうぼ



里の女(前シテ)が帝王(ワキ)に、三千年に一度花咲き実のなる桃が今咲いたが、これは君の御威徳によるものとして捧げたいと奏聞した。帝王はさてはそれは聞き及んでいる天上の西王母の園であらうと喜び、天上の仙女の姿を目のあたりに見るのは不思議なことだという。里の女は真はわれこそ西王母の化現であるとかかし、桃の実を結ばせようといって天に上った。

《中入り》

帝王が管絃を奏して天女の天降るのを待っていると、やがて侍女(ツレ)を従えた西王母(後シテ)は光輝く妙なる姿で現われ、帝王に桃の実を捧げ、舞を舞い、天上へ上る。

大蔵流

狂言 伯母ケ酒

おぼけさけ

酒を商う伯母が振舞ってくれないので、甥は武悪の面をつけて鬼に化け、伯母をおどして酒を飲む。面が邪魔になり、膝頭に掛けたりして飲むうち、酔いつぶれて寝てしまい、伯母に正体を見あらわされる。

演技・演出

酒を飲む場面は、最初は左手で面の顎を上にあげて飲み、次は面を顔の右横向きにつけ、頭を横にふり、

足踏みをしておどした後に飲む。

さらに、安座して右手で面を伯母の方に差し出して飲むこともある。最後に、横になって右膝頭に面を掛け右足を踏んでおどした後に飲む。

このように伯母をおどしながら飲むが、酔うにしたがつてしだいに大胆になり、振舞がぞんざいになったあげく、寝てしまう。

観世流

能楽 正尊

しょうぞん

平家追討に功績のあった義経も、いまは兄頼朝の不興をこうむって、京都堀河の邸に、静御前や武蔵坊弁慶らにかしつかれて謹慎しています。そこへ、鎌倉で武勇をもって聞えた土佐坊正尊が、頼朝の密命をうけて、義経を討つべく上洛してきます。(この能はここから始まります)

義経(ツレ)はその意図を見破り、先手をうって弁慶(ワキ)を正尊(シテ)の旅宿につかわし、堀河の邸に強引に同道させます。そして義経の面前で、正尊をきびしく詰問し、事の実否を糺します。

正尊は、ただ熊野参詣のためにやって来たのだと弁明し、討手にきたのではない旨の起請文を書いて読み上げます。義経は、もとより偽りの誓いと知りつつも、

その名文を賞し、酒宴をもうけ、静(子方)に舞をまわせるなどして、もてなして帰します。

《中入り》

しかし弁慶は油断せず、侍女(アイ)をひそかに正尊の旅宿につかわして、様子をさぐらせます。果して彼等は夜討ちの準備をしているので、一同は用意をして待ち受けます。そこへ、正尊は郎党(ツレ・立衆)を従えて攻めかけて来ますが、かえって部下は次々と討たれ、自らも生け捕られます。



演者紹介

○印は重要無形文化財(総合指定)保持者

○シテ方(観世流)	○大西智久	○上田貴弘	○井上裕久	○笠田稔	○杉浦豊彦	○坂口信男	○多利信之	○今村嘉利	○山田義高	○田中章文	○上西拓司	○大西礼久	○吉井基晴	○吉浪大介	○笠田昭晃	○藤谷音雄	○寺澤幸裕	○齐藤信輔	○水田雄晤	○松野浩行	
	観世流職分	観世流準職分																			
	大阪	神戸	京都	京都	京都	福岡	福岡	福岡	姫路	西宮	大坂	西宮	大坂	京都	神戸	神戸	大坂	大坂	大坂	京都	京都
	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在	在

今村嘉太郎	今村哲郎	上田宜照	上田絢音
大坂	大坂	西宮	西宮
在	在	在	在

○ワキ方(福王流)	江崎金治郎	江崎敬三	江崎英基	江崎昭
江崎家	江崎家	江崎家	江崎家	江崎家
姫路	姫路	姫路	姫路	有年
在	在	在	在	在

○囃子方	辻芳昭	辻雅之	清水皓祐	久田陽春	上田悟	野口亮
大倉流	大倉流	大倉流	大倉流	大倉流	大倉流	森田流
大鼓	大鼓	小鼓	小鼓	小鼓	太鼓	太鼓
大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	大坂	神戸
在	在	在	在	在	在	在

○大蔵流	○大蔵流	○大蔵流
茂山千五郎	茂山七五三	茂山彦
大蔵流	大蔵流	大蔵流
大鼓	大鼓	大鼓
大坂	大坂	大坂
在	在	在

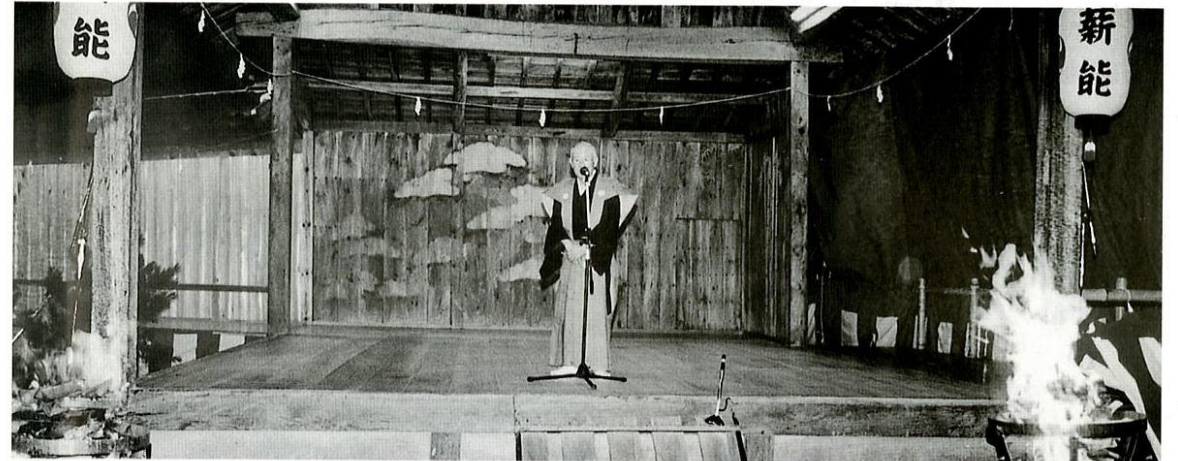
八幡神社奉納新能の記録

7	6	5	4	3	2	1	回
3・9・21	1・9・16 平成	62・9・26	60・10・5	58・10・1	56・10・24	55・10・4 昭和	年月日
經世流 正 指大西雅之助	觀世流 菊慈童 江崎金治郎	觀世流 翁 三番叟茂山千五郎 千才觀世清和	觀世流 弱法師 江崎正左衛門	觀世流 三井寺 浦田保利	觀世流 鉢木 江崎金治郎	觀世流 羽衣 江崎金治郎	演
狂言 瓜盜人 綱谷正美	狂言 呼聲 丸茂山やすし	狂言 二人袴 木松村正雄	狂言 昆布売 伊藤忠三郎	狂言 水掛智 茂山あきら	狂言 瓜盜人 茂山あきら	狂言 柿山伏 茂山千五郎	目
觀世流 安達原 江崎金治郎	觀世流 石橋 中藤村彌三郎	觀世流 狸々乱 江崎金治郎	觀世流 葵上 江崎金治郎	觀世流 小鍛冶 江崎金治郎	觀世流 紅葉狩 江崎金治郎	觀世流 土蜘蛛 江崎金治郎	

14	13	12	11	10	9	8
17・9・3	15・9・6	13・9・1	11・9・4	9・9・6	7・9・2	5・9・11
觀世流 張良 江崎敬三	觀世流 藤戸 江崎金治郎	觀世流 卷絹 和田英基	觀世流 高砂 江崎敬三	觀世流 安宅 江崎金治郎	觀世流 吉野天人 坂口信男	觀世流 鶴龜 井上嘉久
狂言 賞智 茂山千五郎	狂言 伯母ケ酒 茂山千五郎	狂言 寝音曲 茂山千五郎	狂言 萩大名 茂山千五郎	狂言 素袍落 茂山千五郎	狂言 蝸牛 高井秀重	狂言 口真似 丸石やすし
觀世流 船弁慶 江崎金治郎	觀世流 殺生石 是川正彦	觀世流 俊寛 江崎金治郎	觀世流 井筒 江崎金治郎	觀世流 岩船 江崎金治郎	觀世流 野守 中村彌三郎	觀世流 土蜘蛛 江崎金治郎

◆◆能の略式演奏◆◆

半 <small>はん</small>	能 <small>のう</small>	後シテの登場部分だけを上演する。 フィナーレとして添える場合が多い。
袴 <small>はかま</small>	能 <small>のう</small>	面、装束を用いず、紋服、袴のまま <small>はかま</small> で舞われる、すがすがしい夏の能。
舞 <small>まい</small>	囃 <small>ばやし</small> 子 <small>し</small>	一曲の主要部分を紋服、袴 <small>はかま</small> で、地謡と囃子 <small>ばやし</small> によって舞うもの。
仕 <small>し</small>	舞 <small>まい</small>	一曲の一部分を地謡だけで、紋服、袴のまま舞うもの。
番 <small>ばん</small>	囃 <small>ばやし</small> 子 <small>し</small>	謡と囃子だけで一曲を演ずること。つまり音楽部分だけの演奏である。
素 <small>す</small>	囃 <small>ばやし</small> 子 <small>し</small>	器楽だけで、登場樂や舞を演奏するもの。
一 <small>いっ</small>	調 <small>ちよう</small>	謡手ひとりと鼓ひとりで曲の一部を演奏すること。難しいものとなる。
一 <small>いっ</small>	調 <small>ちよう</small> 一 <small>いっ</small> 管 <small>かん</small>	一調に笛の役の加わったもの。
一 <small>いっ</small>	管 <small>かん</small>	笛だけの独奏。
無 <small>む</small> 謡 <small>よう</small> 一 <small>いっ</small> 調 <small>ちよう</small>		鼓ひとりだけの独奏。
素 <small>す</small>	謡 <small>うたい</small>	ひとり、または数人で一曲を通して謡うこと。
連 <small>れん</small>	吟 <small>ぎん</small>	曲の一部分を数人で謡うもの。
独 <small>どく</small>	吟 <small>ぎん</small>	曲の一部分をひとりで謡うもの。
小 <small>こ</small>	語 <small>かたじ</small>	いわゆる物語の部分をひとりで語るもの。
	舞 <small>まい</small>	能の仕舞にあたる狂言の舞。能のように一曲の一部でなく独立した小品である。



当舞台に於いて旧くは山崎藩主本多公の奉納薪能又、昭和55年より平成17年にかけて奉賛会による薪能が14回にわたり開催されました。

300余年の風雪にたえて尚建立時のたたずまいを十分にしのばれる長い歴史をもった由緒ある舞台でしたが、老朽化が著しく、平成19年町内篤志家の寄進により、大改修を施すこととなりました。新装なった舞台は入母屋造り、3間四方の本舞台に後座・地謡座・橋掛りを備え、鏡の間を兼ねた約18坪の楽屋を併設するものです。

【お知らせ】

山崎八幡神社薪能奉賛会を支える宍粟市謡曲同好会では、謡曲・仕舞の稽古を各社中で行なっております。稽古をご希望の方はご連絡下さい。初心者大歓迎。見学だけでも結構です。

連絡先

秋田泉謡会	大谷 正之	七二〇一五八
池田掬水会	伊野 操治	六二一六〇〇
宇田唱謡会	宇田 渡	六二一〇八二六
内山北露会	内山 正作	七四一〇〇二三
鶴崎観和会	鶴崎 和美	六二一〇一四七
波賀翠謡会	大成みちよ	七五―三五二三
山崎集杉会	塚田 清一	六二一〇〇六一
山崎篠謡会	原 忠雄	六二―二八七九
山崎福王会	葭谷 驍	六二―二七四六

(五十音順)

ご協賛者ご芳名

宍粟市文化協会様	庄 清 様
宍粟市商工会様	栗 山 章 様
龍野ロータリークラブ様	大 成 み ち よ 様
山崎ライオンズクラブ様	宇 田 渡 様
江崎福王会様	伊 野 操 治 様
姫路薪能奉賛会様	樽 岡 敬 祐 様
龍野龍諷会様	西 川 博 敏 様
新宮福王会様	藤 井 慧 乗 様
金井信治様	(株)竹川鉄工所・竹川光郎様
玉田眼科・内科医院様	

能 薪 祝

※八幡神社奉納の第十五回薪能の開催に当りまして、いつもながら格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできませぬ、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていることもあります。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。